



蓮也は舞踏会でエウリディーチェと会った。そして、それからというもの、舞踏会に出ると決まってテラスで一人外を見ているが、エウリディーチェが話しかけてくるのを心待ちにしていた。

エウリディーチェ

「蓮也様、先日は失礼致しました」

蓮也

「気にすることはない」

エウリディーチェ

「今日もずっとこちらで？」

蓮也

「ああ、悪いか？ああいうのは性に合わない」

エウリディーチェ

「私も同感ですわ。しかし、人間って面倒なものですね。こうして何事も演じなければいけないなんて。けど、私自身も思っている私そのものも演じているのかもしれないわね」

蓮也

「あなたの言っていることが私には理解できない」

エウリディーチェ

「人には魂ってものがあるわ。私とは別のものだと思うの。私自身には嫉妬とか執着ってのがああるわ。けど、それは魂を覆っているだけだと思うの。それを演じさせられているか、自ら演じているかの違いなのかも、と思いますの」

蓮也

「この前は宇宙の星々の話で、今度は魂の話か」

「エウリディーチェ、あなたは変わっている」

と言いながら、蓮也は少し微笑んだ。

エウリディーチェ

「蓮也様の微笑む顔をはじめてみましたわ」

「それでは、これで失礼いたします」

エウリディーチェも蓮也に微笑みかけ、一礼してその場を去って行った。

そう言われて思い返してみると、蓮也は自分が最後に何時笑ったり微笑んだか記憶になかった。

その次の日、宮廷の薔薇園で薔薇を見ていた。

その薔薇園は先王がつくり、その時は真紅の薔薇園であった。それを蓮也の義理の母が引き継ぎ、ピンク色の薔薇も植えられるようになったと伝わっている。ちなみに、この義理の母親は、舞也の実母であるが、舞也・蓮也を分け隔てなく可愛がったらしい。しかし、蓮也が5歳の頃に、この義理の母は亡くなっている。

そこへロータジア国の最高位・白金騎士ゼイソンが通りかかる。

王国随一と言われる存在であり、高齢ではあるが、未だ現役で職務をこなしている。



ゼイソン

「若君、いつになくボンヤリとされておられますが、どうなされましたか？」

蓮也

「ああ、爺か。何でもない、休憩しているだけだ」

ゼイソン

「先王様も、この薔薇を見るのがお好きでした」

ゼイソンは蓮也の幼少時からの教育も兼務していた。

ゼイソン

「・・・おや」

「さては、恋でもなされましたな」

蓮也

「・・・爺、恋とは何か？」

ゼイソン

「巷の定義では、特定の異性に想いを寄せることですかのう」

蓮也

「ふむ」

ゼイソン

「しかし、エネルギーレベルでは少し違う説明になります」

「人体には七つのチャクラがあり、その真ん中のハートチャクラは通常は緑のオーラを放っていますが、それが誰かに想いを寄せるとピンクになります。それを「恋」と呼んでおられます。そして、そのエネルギーが相手のハートと繋がりあったことを「愛」と呼んでおられます」

つまり、ゼイソンの説明では、「恋愛」とは、エネルギーレベルの変容であり、その変容した者同士の感応である、と言う。

蓮也

「それで、私の胸のチャクラはそのようになっているのか？」

ゼイソン

「いかにも。ちょうど、このピンク色の薔薇のようなお色ですぞ」

蓮也

「爺は恋をしたことがあるのか？」

ゼイソン

「さあ、どうでしたかのう。そんなこともあったかもしれませぬが、遠い昔のことですわい」

蓮也

「爺は、その人とは一緒にならなかったのか？その人は今、どうしているのだ？」

ゼイソン

「さあて、どうでしょうなあ。しかし、きっと、どこかできっと幸せに暮らしていると信じておられます」

蓮也

「爺は、その人のことを自分のものにしたいとは思わなかったのか？」



ゼイソン

「若い頃は、そのようなことも考えましたかのう」

蓮也

「で、手に入れなかったのか？」

ゼイソン

「若い頃、「恋」をした時はそう考えたかもしれませぬが、それが「愛」になると、人はそう思わなくなるのかも、ですじゃ」

蓮也

「そんなものなのか」

ゼイソン

「まあ、昔のことですのでのう、ほっほっほ」

恋が愛になり、愛が永続して穏やかなものになると、相手そのものの幸せを祈る状態になるのかもしれない。それはピンク色のハートチャクラが再びグリーンへと戻るなのであるが、そのグリーンは更に深い輝きを放つものであろう。